343
318

始

特230
691

心の華叢書

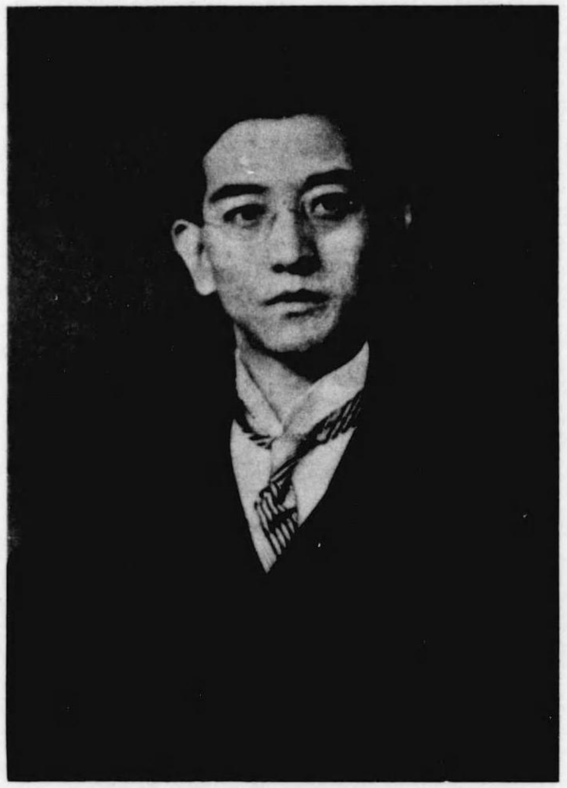
伎藝天（改訂本）

川田順 著

東京竹柏會發行

著者寄贈本

昭和七年 寄贈 帝圖



著者のおもかげ

（大正七年寫）

伎藝天改訂本序

「陽炎」を改訂したのと同一の理由で「伎藝天」をも編纂し直したのである。その理由に就いては前者改訂本の序に書いて置いたから、ここには繰り返さい。

ここに取り入れた歌の制作期間は勿論初版のそれと同一であつて、明治四十一年から大正六年まで、作者二十七歳から三十六歳までの十年間である。歌數は初版よりも百餘首增加して三百七十一首、それを明治末期篇と大正初期篇との二つに大別した。十年間の歌

を一かたまりにするよりも四五年づつの期間に區別する方が、作者の歩いて來た道を見てもらふのに便宜だと思つたからである。卷頭かたみぐさ(初版には紅涙集)の章に「その二」と附記してあるのは、同一の題目の歌が「陽炎」の中にもあるからなのだ。岳麓湖上吟、相摸歌、近畿歌鈔等に就いても同樣である。

初版に賜はつた佐々木先生の御序文中に、予の詩境であつた情熱の歌の多數を削除した事に對して同情を下されてゐる。それで今回改訂に際しては、當時の日記中の歌までも拾ひ集めて無遠慮にその大部分を收錄する事にした。それでもなほ、自分の最も深刻な記錄である叙情の歌章が當年の歌風に累せられて春の靄のやうな朧

氣なものである事は、今日顧みて寂寞に堪へない。

明治大正の交から數年間といふもの、予は何故か漸く歌道から遠ざかりかけてゐた。それが、大正七年春「伎藝天」を公にしたのを轉換期として、昔馴染の歌の國へと復歸した。その後、再び青年時代の熱を以つて精進の歩みを續ける事になつた。斯うした次第で、十年間の收穫にしては貧弱過ぎる此の一卷に對して、予みづからは今日なほ深い愛着を持つてゐる。

昭和四年十一月

川田順

伎藝天初版序

○

川田順君の歌集の出版されるとは、自分の大いなる喜びである。思ふに、自分にとつて近來の最も嬉しい事の一つである。

川田君と自分とは、年久しい交りであるばかりでなく、因緣もまた古い。順君の父君甕江先生には、直接敎を請うたことはないが、自分は少年の時、先生の宅で催された古文の講讀の會に傍聽を許されて屢々出席したことであつた。川田君が竹柏園に入られたのは、今から二十年餘り前で、當時小川町の舊居の樓上に來られた君の城北中

學の制服姿は、未だに目に殘つてゐる。その當時から君の歌には才氣がほとばしつてゐて、すでに前途の光を示してゐた。而して君の歌に對する熱心もまた非常で、月と共に年と共にその伎倆は進んで行つた。君が高等學校入學試驗の間際には、自分から殊更に勸めて暫く作歌に遠ざかるやうに言つた程であつた。しかも滯りなく入學が出來て、その夏を大磯に避暑して居た自分を訪はれた。その時小花清泉君は自分の家に宿つて居られたし、前の年高等學校に入られた長壽吉君も來り訪はれたので、西升子刀自や雪子等と共に、一行六人、船をやとうて相摸川に鮎狩に遊んだことであつた。とある岸の松かげ、うづまく淵の浪に、君のうら若い瞳のかゞやいたことが、今

もまさやかに思ひ出される。

君の志したのは固より文科であつた。大學では英文科に入り、沙翁劇の研究には殊に興味を持たれたやうであつた。然るに恰も小泉八雲氏の大學を去られる事があつた時、小山内薫氏はとどまり、武林無想庵氏は退學し、君は法科に轉じた。君の轉科については、自分はまことに遺憾に堪へないで、かたくとどめたのであつた。然し君は之を斷行した。文科は去るが文學は捨てぬ、とは當時君が自分に答へた最後の詞であつた。法科大學を出でて後、君は實業界に入つて、久しく大阪に住んでゐる。

高等學校大學時代を通じて、君は益々和歌につとめ、雜誌「心の華」に

寄せた君のその折々の詠草は、眞に同人間の異彩であつた。社會に出てからはさすがに以前ほどではなかつたが、しかも君の作は絶えなかつた。そのやう〳〵君の歌を見る折が少くなつたのは、最近のことに屬する。

然るに昨年の七月、自分が大阪朝日新聞社の講演會に招かれて歸るさ、間島弟彦君が自分の爲めに、京都鴨川ぞひの家に、一夕の宴を催された。京都大學の新村博士、三浦博士、長君、さては君も一緒であつた。東山は模糊として星明りに浮び、水を渡る涼風は簾を動かし燈火をゆるがして、清興すこぶる忘れがたいものであつた。かの相撲川の鮎狩の日の話も出た。石榑君、木下君、吉田君、橘さんなどの噂も

出た。そのうち、長君は京都の人々と話される。君と間島君と自分とは現代の歌壇、また將來の和歌に就いて談り合うた。自分は、我ながらめづらしく思つたほど興に乘じて、長く語つた。夏の夜は早く更けて、彼方此方の涼みの床も人影が稀に、川瀨の音がしめやかであつた。

晩秋の風が西片町の庭の萩や芙蓉の枯葉を音づれた頃、君の許から、病氣の爲め小閑を得たゆゑ、歌集「伎藝天」を公けにするとのたよりを得て、大いに喜んだ。蓋し君の集は、吾が「心の華叢書」が、最も早く出だすべくして、而も君自身の都合で出ださなかつたものであつた故である。況して暫く和歌に於ける消息を聞く事の少なかつた君が

殊に多少の新作をもあはせ集めて、世に問はうとする意氣を聽くことは、自分の最も嬉しく感じたところであつた。或は、かの鴨川の夜語りが、君をして此の決心を早くせしめた一因とも成つたのではあるまいかと、喜ばしかつた。やがて自分の許におくられた草稿を通讀して、直ちに感じたのは、竹柏園集、あけぼの、玉琴當時の作で自分の胸にのこつてゐたものなどの、概ね省かれたことであつた。すなはち君は、當年の君が得意の詩境ともいふべき情熱の歌の殆ど全部を捨て去つたのである。歌人が自ら集を選ぶに當つて、嚴密なる取捨を行ふ時の苦心は、實に容易なものではない。自分は自分の經驗から推して、君がこの度の集に於ける自選の態度に對しては、眞に同情

の念に堪へぬ。さりながら自分としては、この君の集は、斯様な意味に於いても、君の從來の和歌に於ける業績の凡てを現はしたものではないといふ事だけを一言せざるを得ない。

しかも君としては、青春時代の舊作を凡て捨て去つた態度は、更に新しい境地を詠み開かうといふ精神の故である。この精神こそ、自分の、君の爲に大いに喜び大いに尊敬するところである。而して君が歌の前途に對しては、その昔君が少年にして自分の許に來られた時に抱いたと同じ希望と期待とを抱かざるを得ない。

大正七年一月　　竹柏園主人しるす

○

舊友川田順君は、その頃私達の仲間に於ける唯一の歌よみであつた。多藝な吉田白甲君や多能な小山内薫君も、勿論、作る事だけは盛んに作つたけれど、その如何にもくろうとらしい點になると、如何しても、竹柏園主の高弟たる、歌學に通じた川田君にはさすがに一籌を輸せざるを得なかつた。さうして私の如き者に至つては、その當時と雖も、今日に於けると同樣に、遺憾なく本來の不風流さを極めてゐて、三十一文字の歌といふものに就いては、徹頭徹尾、無感覺な又無理解な門外漢であつた。

今からもう十四五年の昔にならう。私達がまだ角帽を蒙つて間もない頃、一高出身の文科大學生の間に小山内君を中心とした「七人」と稱する文藝上の結社が組織されて、今の有島生馬君が人間の七情を寓した七つの能面をば表紙に描いてくれたりした純文藝の雜誌まで發行してゐたが、川田君も私もその「七人」のうちの各一人であつた。

私達は殆ど毎日のやうに、お互ひの住居を訪問しあつて、夜を徹する事も厭はず、學校を休む事など何とも思はず、一向專念にただ〳〵文藝の事ばかり語りかはしてゐたものであつた。

私は色の拔けるやうに白い、口元のきりりと引きしまつた、光の强

い、黑目の濃い、たえず俯目がちであつた、大きな眼の、若々しい川田君の美貌を思ひ出す。それから多く竪縞の大柄な衣服に包まれた小じんまりとした川田君の姿かたちを思ひ出す。

私は小山内君と私とを前にして、黃いろい光りを漾はした、五分心の臺らんぷの下へ擴げられた、その頃あつた雜誌白百合の中から、特に氣に入らぬ詩句をば拾ひ出しては誦し、拾ひ出しては誦した後、「こんな拙い詩！」と、唾吐くやうに罵りさま、矢庭にその雜誌を取り上げて、いま〳〵しさうに、腹立たしげに、ずたずた引き裂き散らした川田君のけんまくを想ひ出す。

私は又、その當時本鄕座に上場されて、空前絕後の大入りを占めた

川上一派のハムレット劇に對して、しきりに沙翁の神聖を瀆するものだと云つて、恰も熱烈な宗教家の如く、措くところを知らぬまでに憤激した川田君を想ひ出す。

が、さうした川田君も、一年も經ぬうちに、いろ〳〵な事情から、文科大學を去つて、改めて法科大學の學生と成つた。文科大學は勿論詩の國ではなかつた。けれども、沙翁やホメロスの神と崇められてゐる國から、一朝にして政治經濟の俗世界へ、その志を轉換して了つた川田君は、感傷的な私にとつては、思ひがけなき反逆者であつた。私は不平のあまり、「どんな貧しい暮しでも、わしや嬉しいと思ふもの」と特に川田君の愛誦してゐたお染の文句を引照して、川田君を詰つて

やつた事を覺えてゐる。

しかし、今日となつて見ると、川田君の取つた人生の道程は、川田君としては、慥かに正しい道であつた事が思ひ合はされる。

實社會といふ怪物は、その眞白な爪と牙とを劍のやうに磨ぎすまして、無智な、無經驗な、不用意きはまつた私達學生が、その表面へ押し出されて行くのを待つてゐた。その怪物に對抗すべき唯一の武器は、わづかに算盤があるばかりである。川田君は怜悧にも逸早くその點に氣がついたものであらう。

川田君は斯くして大學卒業後直ちに住友家の人と成つた。さうして年々に累進して、今日では總本店に於ける重要なる地位を占め

てゐられる。當時の事を想ひ出すと、本當の川田君の心事を了解する事なしに、かりにも川田君の行動に不平を抱いた私自身の淺薄さに對して、一方ならぬ慚愧と後悔とを感ずる。

川田君に引きかへて、私は今日でも尙十四五年以前と同樣に、依然として算盤を陋しみ文筆を尊しとする昔の書生生活をば續けてゐる。現代にあつては、その私の尊しとしてゐる文筆を愛好する學生と云へども、決して算盤といふものをば陋しまうとはしてゐまい。學生でさへ既にさうである。まして職に文筆にたづさはる人々は一人としてその創作をば當然市場へ送るべき一箇の商品として考へてゐないものの無いのに不思議はない。

幸にも、わが川田君は、今日實務家である。從つてその創作をば商品として市場へ送る必要はない。私は川田君が單に歌よみとして或は歌商人として、この社會に立たなかつた事を喜ぶものの一人である。

大正七年一月

武林無想庵

伎藝天目次

明治末期篇

かたみぐさ　その二（六十九首）……五頁
旅の歌の中に（七首）……四頁
岳麓湖上吟　その二（十二首）……四頁
相摸歌　その三（二十五首）……五頁
伊豫歌（七首）……六頁
戀の歌の中に（十二首）……六頁

四　季（七首）……七五
近畿歌鈔　その二（三十二首）……七九
雜（三十二首）……九六
計　二百三首

大正初期篇

雜（五十七首）……一一五
四　季（十七首）……一四四
近畿歌鈔　その三（二十一首）……一五三
みなし兒の歌へる　その三（七首）……一六四
早春の山國にて（九首）……一六八

水國記（九首）……一七三
上海より哈爾賓へ（八首）……一七八
阿倍野のほとりに住みて（十八首）……一八三
かたみぐさ　その三（二十二首）……一九一
計　百六十八首

伎藝天

川田順

明治末期篇

自明治四十一年
至明治四十五年

かたみぐさ　その二

大阪に移り住みて

遠つ人君によそへて見る星の光うるみぬ
泣きいますらむ

宵の月さくら落葉に音すればもしやと思ひ
ふ百里の人を

月の光海をいだきて波と波ささやく夜な
りいかで來ささぬ

おもかげや水むらさきの夕ばえに都鳥みゝ
るおばしまの人

眼とづれど天つきらめき映るごと心のひ
とみなほ君を見る

上京二首

うちよする駿河の國府ぞはしきやし君が
生まれし駿河の國府ぞ

住みよきや西の國はと問ひたまふいらへ
も知らず悲しかりけり

あながちに絶ちて絶ゆべき戀ならば去年
の彼の日に別れたりしを

敷島の道に立つ名は少くてこの戀ゆゑに
語り繼がれむ

君を率ていなば世人の呪咀うけむのろひ
も何ぞと思ふ日のあり

人追ひて荒野に入りぬ道盡きて海みなぎ
りぬ夢さめにけり

佛生會それならずとも君を見し卯月八日
の日を忘れめや

君と吾がなかに花咲く國七つうつくしみ
つつ日は空ゆくか

大江橋のほとりの寓居にて

淀川にみぞれ降る日のさびしさを春來し
君に告げむと思へや

天さかる鄙の長路を來たまひし旅の疲れ
も見えぬ君かな

日はのぼり月も出でくる東より來ましし
君を何にたとへむ

われはさも思はぬものをうつくしき水の
都とほめたまふかな

まれに逢ひて言ふまじき事言ひにけりす
すり泣する君の悲しさ

文樂座

君と見るあやつり芝居しみじみと身につ
まされて悲しきはよし

須磨寺二首

須磨寺は今日を櫻の花ざかり行けども行
けども人目うるさし

この寺のさくらの落葉はらはらとさびし
き時にまた來ませ君

海岸にて十首

茅渟の海と相摸の海といづれぞやいづこもよけむ君とし行かば

さねさし相摸の海は荒らかりきこの茅渟の海の春の凪ぎはも

よりそひて歩めばわれに若き日のいのちの海の紫が照る

君が歩みたどたどしけれ春深き磯のにほひにむせびて行きぬ

わたつみも君が足跡惜しむらし浪も來寄〻せぬ春のまさご路

足跡を浪は消すとも今日の日は心に殘り〻とこしへにもが

君を吾が松帆の浦も見ゆと言へば海のむ〻かうをながめたまひし

この海の春の夕浪たちかへりまた見むものを嘆きたまふな

うらうらに春の海原霞むなり悲しきことは今日は語らじ

沈む日と君とのなかをくれなゐの眞帆しゝて過ぐる春の須磨人

夕雲雀いま舞ひあがれみひとみを向けたまふまにそと別れなむ

鳥ならば二人かくれて歌はむを麥生の末の初夏の森に

言ひさして空うちまもる君の眼に涙きら
めく木がくれの月

君泣けばわれも音に泣く木下闇冷たくか
をる何の花ぞも

うつし世の悲しさうれし照る月に君が涙
の眞珠なす時

有馬二十首

河鹿なく山川の瀬を玉ふみて七つわたれ
ば君いますと里

道のべの清水のもとにいます君ながくも
われを待ちたまひしや

うつし世にそはれぬ二人よりそひてしば
し影みる山の井の水

葉ざくらに君こもります津の國の有馬の
里はよきところかも

有馬山いで湯の里の十二坊さくら青葉に
ふかくこもれり

君います十日を山の鶯は聲絶えず啼け青
葉がくれに

涼しき眼つぶらに張りて飛生鼠(ひさびね)の逃げし
杉間をまもりたまひぬ

地獄谷われはも行かめ君さへにおそれた
まはぬ事の悲しさ

地獄谷虫は死ぬなりそのもろき虫のいの
ちをうらやみにける

いのちとるこの鳥地獄虫地獄虫に鳥にも
ならむとぞ言ふ

地獄谷毒霧立つとふ岩の上にならべて去
りぬ二人摘みし花

君と來ればこの古寺も匂ひありつつじの
花の咲き照れる時（瑞寶寺）

有馬山みねの白雲かかる日のいのちのう
ちにあるがうれしさ

山藤や君と行く道きはまりて眞下に淵の
青みたるかな

有馬山鼓が瀧の水沫(みなわ)とも消(け)なば消(け)ぬべく
嘆きたまふや

夏かげのこの山櫻人しれず散りゆく見れば
ここだ羨(とも)しき

欄干(おばし)によりそひ仰ぐ山の上の妙見堂の燈
は更けにけり

山の上に一人燈ともす堂守はさびしから
むと言ひたまふかな

地獄谷毒ある夜霧しのび來てこの戸より
入れわが枕上

君をおきていで湯の山を下り來れば雨さ
へふりぬ暗き青葉に

大阪北區大火の時二首

君が來し川べの家も燒けにけりその燒け
跡を見には來じとや

大阪は住みうきところ歸り來よはや歸り
來と言ひたまふかな

上京八首

堪へ得ねば逢ひにを行かな君や來むわれ
や行かむのたゆたひもなし

東路の道の長手を君ゆゑにいくたびわれ
は往來しぬらむ

君追ひては荒野のはても行きぬべし都に
來るはやすけかりけり

朝な夕な寄りたまふこの欄干にわれもい
寄りてものをこそ思へ

こと問ひし昔男の都鳥このおばしまに近
く浮きゐる

思ひ出でて語らふ今日をかの山の櫻の紅
葉ひとり散るらむ

地獄谷眼には見ゆめり數しれぬ虫のいの
ちの死ぬる見ゆめり

地獄谷鳥は死ぬなり墮ちてなほ生けるわ
れこそ悲しかりけれ

歸るべき戸はとざされぬいづくにも率て
走れよとおほどかに言ふ

人つれて大野の闇を走る吾がうしろに前
に落つる天の火

神ならず人の舌もて呪はれむ君が御名こ
そ悲しかりけれ

旅の歌の中に

しほ原や里わつづきの河原湯の皆水かぶる五月雨のころ

秋かせや神代の人の柩など沈めるあらむ山のみづうみ

掛婁川の畔にて

石はこぶ車三つ四つ雲の峰ひろき磧のなでしこの花

桑名

雲低し揖斐と長良のさかひ洲の葦ひたひたに越す秋の水

上州磯部温泉

冬ざれの湯の町に向き燒土の層あらはなる河原の小丘

笹子峠を越えて

雪まだら溶け光る山にかこまれて國の平の青み煙るも

尾道

船ゆ仰ぐみなとの山のちさき寺若葉のなかに朝の鐘鳴る

岳麓湖上吟　その二

ひとなびき霧雨すぎし湖の上に星の尾に
似るうすきうすき虹

暮近みちさき旋風に又遇へり薊ふみゆく
湖の上の岡

夕富士の裾野灰いろに靄ごもる大き景色
の涙ぐましも

何もなしただ星空を黝(くろ)うせる大き斜面の
おごそかなりや

船津三首

富士を仰ぐ南おもての小座敷に部屋かへ
てあり湯を出で來れば

前の湖は蝙蝠の背にうちのりて木精(こだま)のあ
そぶゆふべとなりぬ

暮れてなほ燈(ひ)ともしにこぬ部屋ぬちに湖
の魔風のしめらひ入るも

樹海にて

あれほどにききしをさても、踏み迷ひ、氷室の道べ來しかもよわれは

精進湖三首

暗き湖よ大方山にかこまれて南ばかりが野明りすらし

きらきらと夜凪の湖を閃めかし氷室の馬の松明ゆくも

笛ぶくろ君紐とかず湖の上に月夜の富士のただ更くるかな

本栖湖

牧の牛かたまりて湖へ下り來なり夕立せ
まる大裾野原

相摸歌 その三

啼くは雲雀樹は皆松の平塚の濱街道を大
磯へ行く

國府津

風浪の大うねり來て濱こゆる汐げの上に
箱根晴れたり

小田原在早川二首

人は來ず濱の宿屋のひねもすを八つ手の
花に虻とびめぐる

四艘張りの渦輪鰐の網の浮木ごとに鷗お
りゐる夕燒の海

石橋山

船一つかかりて冬のゆふべなり石切る山
の下邊の海は

箱根に大水害ありし年の晩秋、底倉にて二首

かへりざきの躑躅しぐれて雲低し湯槽よ
り見る底倉の山

にはか水谷の八谷を一押しに荒れたる秋
のむら紅葉かな

宮城野あたり五首

湯の山の欅ひともと黄ばみたり石うづた
かき河原を前に

夕紅葉出水のあとの假橋に荷をくづした
る馬とまり居り

禿山と燒石原のなかにある狹き平の菊ばたけかな

山津浪のあとの曝石ゆふやみの磧に白くかぎりも知らず

冬近しやまめ捕る瀨の上つ邊は燒石まろぶ空瀧にして

乙女峠途上四首

磧みち秋かせさむし大岩の横臥すなかを幾曲りしつ

山少女すすきおふる谷の岩かげに蛇の來
るといふ湯を敎へけり

黍畑の小鳥追ひ立て紅葉せし雜木林にわ
が馬は入る

わが馬のふみすべらしし石ひとつ奈落に
ゆくか冬の谷底

大湯谷

水荒れの谷を渡りて山に來れば硫黄掘る
小屋の一つありけり

姥子途上四首

しぐれきぬ干菜入れよと馬方の聲かけて
ゆく山の一つ家

わが駕籠のすすきの丘をまがるまで犬吠
えてゐる山の一つ家

石うてど弱りし蛇のえも逃げぬ枯野の道
のうすき日の影

雪の富士を目交にして家ありぬぶなの大
木の黄ばめる蔭に

蘆の湖二首

杉かこむ底無し湖ゆゝさ霧のぼり深山ぐも
りのをやみせぬ秋

實朝が八たび詣でし山やしろ老杉くろし
冬の湖の上

湖尻

湖尻の道暮れゆきて何か知らず大きなる
葉のしきり落つなり

塔の澤

湯の宿は水に突き出す二層(ふたかは)の盆栽棚の木
々紅葉せり

伊豫歌

連枷の唄補陀落に似てかなし南海道の麥
秋を行く

別子銅山三首

鍬道を下荷のすべる鈍きおと頭の空の霧
にこもれり

谷底の坑夫長屋のもやひ風呂さびしきど
よみ雨にこもれる

燒跡のくづれかまどにかけし湯のふつふつ煮えて人雨に立つ

石鎚山三首

岩のみちすずろさぶしもゆきあへる女行者の目見のけはしみ

落日は濃き紫に染めたりな石鎚山の岩のはだへを

いかし峯の石鎚の岩くろずみてぶなの林のたそがれゆくも

戀の歌の中に

おそろしく悲しくつらき日のなかに華や
ぎし日もありし戀かな

われのみは戀せぬ顔のしらじらしよその
噂に眉ひそめける

瞳上げ聽きゐぬ宇治の大姫の戀ひられし
日は三十(みそぢ)といふを

身を葬るわざはひ言をふといひぬ一人の
女よろこばすべく

今踏むはわが世のはての一歩にあらじか
されど御手にすがりぬ

疑の塵かも入りし戀の笛うつくしき音の
ふととまりぬる

疑の醜のまがつみ胸に來てかげ言すなり
あることなきこと

二夜前おもひほどきし疑の力をそへてま
た胸に來る

女子かな人まじはりに人なれてさとく冷
たく見えたまへども

その時にふと言ひ過ぎし一言を冷やかに
君の忘れざるらし

蛇のすむ日かげの草の冷たさをおぼえて
君が御手はなちけり

ほほ笑みていにける君かいつはりの拙過

ぎたるわが稚さを

四季

わたつみの盃の縁こゆるがにゆたに湛ふ

る初夏の潮

夏の雨冬木が原をはしる火の焔の音す大
玻璃窓に

夏虫をあはれむ一首

あの窓の火を取りて來ば添ひなむと玉虫
姫やそそのかしつる

井戸がへの水あふれ來てひたしけり納屋
のうしろのみそはぎの花

秋日和戸ぐちふさげし敷ごもの小豆(あづき)をふ
みて雞かけいづる

霜日和葉は紅葉して花ちさきあさがほ這
へりうまやの垣に

地獄(じごく)の門(かど)をむらがりくぐる餓鬼のごと夜
風の底に落葉はさわぐ

近畿歌鈔 その二

三條の紅屋に入れば膝の上の糸屑はたき
いでこし少女

うぐひすや金屏の繪に桃山の春のおごり
の夢おもふ時

御厨子の扉こまかに見れば千體のほとけ
ゐがけり木蓮の花

山樂がすみ繪のふすまちがひ棚つり花入
の白菊の花

扉のうちは五彩まばゆき金堂の屋の上の
草に秋の雨ふる

ゆく春の歌の中山塗下駄に又はさまりし
落椿かな

ほととぎす山科みちを横折れて竹多き寺
の門くぐる時

賀茂川の橋裏にすむ蝙蝠の夕風ふけばさ
らしの上を

月の秋を魚板のおとか等持院かどの小家
に藁など打つか

銀閣一首

松かぜや茶煙禪榻風流は國にひとりの東山殿

中京の舊家そだちとめききしぬあらずや今の二人の女

小十人空也念佛の鉦の緒のくれなゐ寒し秋の雨ふる

高尾に紅葉狩すとて一首

霜の朝の石だたみ道からからと俥でぬける妙心寺かな

松かげに落葉をふめばこほろぎのここら
飛び飛ぶ太秦の寺

ゆふかせや稚郎子のみささぎをめぐれる
小田に蛙なくころ

明治四十二年夏大火の後

蜆川やけあとかへす土くれのすて場となりて狹み濁るも

四天王寺境内

大人びしだみごゑ低う唄うたふ乞食童に
秋の日さすも

堀江

裏川にすだれを洗ふ男あり揚屋の窓の夏

菊の花

尻なし川

岸の百舌蒸汽船の笛に鳴き負けて默しぬ

過ぎぬ又も高鳴く

須磨寺一首

松の老木花の若木の下むしろ春七日ほど

酒臭き寺

河内女は早苗うゑけり上つ代のみささぎ

多き山裾にして

赤坂の砦に引くと樋を埋めし跡見にくだ〻る谷若葉かな

花の塵吉水院の縁さきの草鞋のなかの女下駄かな

詠史

ほととぎす吉野内裏の女房があかつきお〻きの神まうでかな

吉野川を上りて二首

夏萩や柚が小唄にのこりたるやさしき戀〻をきくゆふべかな

瀧の上の虹紅(にじく)の小野に妹をおきて筏の床
にいく夜わが寢む

火峯三首

日に七たびかはる御岳のあら姿るり啼く
森の上にそびやぐ

秋の峯は千尋の海の底なりし神代ながら
の靜けさにして

杉黑き底あらはして雲の湖は波立ち渦卷
きなだれ去るかも

いくさ神武甕槌もしら藤の春日にませば
みやび男さびて

七座みし伎樂の面のかはるがはる來ては
あざみぬわが枕上

こそばゆくおぼしめさずや富樓那佛百舌
はしきりに語る秋の日

雜

夢を生む歌人ごころあらをかし足疾し遠
し雲翔るらし

狂へるやいのち十ほど持てりとも遂げじ
と思ふ事うべなひし

春の海に浪少しある心地してこのおそれ
こそをかしかりけれ

その呪ひ螫す力なき秋の蚊の聲とし聞けど夢安からね

言ひ解きて歸り來しゆふべわが智惠をわれと惡みて涙し流る

わが臥たる棺の上に土落す音かとおもふ夜半の時雨を

夢去りぬ棺のなかにふとさめしおそろしさにも似る今の時

雪さびしわが世の冬の天地は白布おほふ
柩のごとも

戀ひ死にし誰がおくつきの埴土を燒きし
酒甕ぞ醉へどさびしき

明治四十二年夏大阪北區大火三首

燃ゆる火をいともかしこみ夜の闇黑は天
のそぎへに退きてゐたり

川をちの下火の焰あけ方のこの家の壁に
ほの映ゆるかも

眞夏の日ただに照りたれひろびろと燒原
の灰燼のほとぼり止まず

明治四十三年七月、妻の父の失せける時二首

生みの親の甦るなすよろこびを時の間お
ぼえ別れけるかな

さぞあらむさあらむされど泣き泣きて汝
が病み臥さばいかにせましや

その冬

丹波路の津の尻山の松蔭の新おくつきに
霜はおくらむ

或る時二首

ちさき事をとがめし日より愁ひげにわが
顔ながめる吾妹子あはれ

いつもいつも笑顔見せませよろこびは世
にこれのみと泣きし吾妹子

文學士高瀬精太殁す、幾多の美しき詩を書きける友なり、二首

沈めるうす笑まひつねにかげろへど言ふ
ことは皆炎なりしかな

蒲公英や赤き棺舍の壁によりて煙草くは
へし汝を忘れず

亡くなりし姪杉山千代子を憶ひて

眞袖ふる少女になりしをもらはれて美濃の田舍へゆきにけるかも

會葬のため大阪よりあわただしく來りつ、掛斐川の岸の一村落なり

葬りの日美濃の大野の夕日見つ十年はさこそさびしかりけめ

その後、虎姫の激震の時

伊吹嶺の裾野に眠るはしき子を搖りさますべき神業ならば

晩秋の一日か某貴公子と語り暮らして三首

黄に枯れし秋の芝草の日にすわり人の愁をしみじみ聽くも

あはれその君が見し人みちのくの何邊(いづべ)い
にけむ生きてあらめやも

君をおきてあらじと思ふゆかしさを君を
見したれかおぼえずをあらむ

文學士川下江村を悼みて二首

たらちねの親に反きて哀しくも苦しみし
道に疾得(やまひ)にけむ

わが戀をわれより先に見出でける目さと
き友は早く失せにき

朝場重三の弟なる人の南洋へ赴くとて遂ひに來にけるは
いつの年の夜にかありけむ、二首

やさしき目見こそはさも似たりけれこの
弟の膽の太さはも

綠の椰子の葉とほりい照る日にくろみた
るらむその頰おもほゆ

嵯峨の茶亭に見し小娘の事な三首

躑躅花水照る頃のせはしさを手傳ひに來
て秋にもなりぬや

搖れ光るゆふべの水を見るとはなく息づ
ける汝のあはれなりしか

京極の花簪(はなかざし)賣る家にかも歸りてあらむ冬ゝ
をさびしみ

大正初期篇

自大正元年
至大正六年

雜

あやめ咲きわが世夏來とすがすがし女見る目もかはりて涼し

三十路(みそぢ)來ぬ目のきはみ青葉かさなりてき
らきらきらと日の光るかも

海のはてはさらにひろらの海なればながめても甲斐のありといはなくに

何故に何故にてふ強き疑問(とひ)退(しぞ)がず今日もただ狂ほしき

その方と一人ぎめしてそれし道野茨の花にかくれて行きけり

青淵を視つむる友の悲しみにひき入れら
れて悲しくなりぬ

ツアラツウストラを讀みて八首

海はよし海に似たるよし就中(なかんづく)われにあら
がひ波立つるよし

わが戀ふる野こそ遠けれたをたをし羊の
蹄(つめ)のとどかぬところ

わが攀ぢしあとより道の壞(くず)え落ちよ高き
は一人住むべかりけり

この人らほそき五つの指さきの爪こそ尖れ拳(こぶし)は持たず

よじあしの汀の泥土(ひぢ)にうごめきて大海原を見さべ知らなく

拭ひたる劍を壁に懸けし時いのちははたとさびしくなりぬ

白き日はわれに照りたれ照らさるるわれなくば日も寂しからむ

數知らぬちさき言葉の垢をためてあはれ
この人ら耳はしひたり

沙翁禮讃一首

何も言はずしてわが額を垂れたるはいに
しへ今に汝一人あり

紅雀ほとほと啼かずほそり羽を冬の日影
にあたたむるかや

葉はくろみ何の老木か知らねども青空の
したに立てりさびしく

わが門に子ら遊びゐしが何か見てひた馳せ去りぬさびしいかなや

紅雀みな死なせたり生けるもの飼はまくは悲しみな死なせたり

追憶の海の底ひに狂瀾を捲き起す力ひそみてあらずや

塔に巣くひし海の鳥なけば雪しまき來る嶋の古城

うつそみの命の惜しさ知りそむる三十(みそぢ)過

ぎこそさびしかりけれ

あらがへどすべなきか眼を押し開けあり

のままなる世を見せむとす

飢ゑつつも食(くら)はであるにくらぶればまし

てすべなし言はまくを言はず

ブカレスト陥落の報を聞きて四首

ちさき國又一つ滅び失せぬよといくさの

年の冬の空見る

冴えとほる雪風の日の空の下一戰(ひといくさ)して亡
びけるかも

ちさき國も生きてしあればせねばならぬ
戰(いくさ)なりけむそこ故に悲し

強き勝て强きは勝てよ天つ日の光のもと
にはばかりあらめや

西暦一千九百十七年いくさの雲に明けて
寒しも

春あらたに灰のなかより萠ゆべくはひた
ひろごりにゆきね大野火

この心何か一つに燃ゆらくはうれしくあ
らむを久に冷えたり

若き人の火の唇がもの言ひぬさめてさび
しきわれのかたはら

亡くなりし母の齢に近よりてすずろに母
のいたましきかな

長らく引籠りて一首

病室のぬくみに咲ける冬咲の牡丹を見つ
つわびしみ思ふ

墮ちはてぬ心さびしも遠き日のよき思出
に涙流れて

わがいのちその一日より遠ひける光にぬ
くみ狂ひ咲すも

よろこびの強き光にまかれつつわななき
走る今のたまゆら

牛込の逢坂の上の吾が家にその頃とぶら
ひ來にし誰々

母の背に負はれける頃おそらくは悲しき
唄を多く聞きけむ

ふりかへりいかに思へど辻褄のあはぬと
ころのあるがおもしろ

實のならぬ花草のみを培ひしかば收穫の
日のせはしさもなく

或る人の死一首

引き過ぎし弓弦のはたと切れしなすその
命こそよろしかりけれ

昨日わが濁しし水の濁れるを今日の渇き
に呪はむとする

うら悲し昨日のわれをわれよりもよく知
る人のなかにまじりて

ゆけど枯野ゆけど枯野の冬の國昨日のわ
れにあふよしもなし

千萬年おなじゆききにとらはれて大日輪
も牢舍を出でず

二心もてば人いふ三心も四心もあれば人
いはずけり

一高の思出一首

葉櫻の影して午後の日はながし紅殼いろ
の校舍の壁に

狼の乳すすろひて生ひたちし人にしあれ
や涙だになき

けもの故けものらしく彼は振舞へりうし
ろめたさのなきがよろしさ

へりくだりゐつついのちは堪へがたし思
ひあがればましして寂しき

冬の野の紅きいばらの實のごともわれの
いのちはちひさく固まる

美濃ざかひ上りを喘ぐ夜の汽車にいをね
ず居れば山くろく見ゆ

ひたぶるに錢を欲りする人間と吾を思ふ

友のあるもうれしも

横堀の柳芽をふき春はきぬ少しはわれの

大阪じみよ

住友家の同僚に示せる歌二首

この家の大き庇のかげに住めどこの大き

家はわれらぞ負へる

初めての歳暮の夜業とその時の牡蠣飯の

味を忘れかねつも

四季

路端によごれし雪のかなしかり二月の日
のほの溫みつつ

多摩川や陽炎もゆる石原へたらたら下り
の草の原かな

牛込の矢來の王とわが呼びし大き木蓮の
咲けるころかも

窓硝子六尺の面一ぱいにしだれ柳の露葉
ゆらげり

雨ぐもる銀いろの空葉柳のしげ葉を透き
てなまめかしけれ

ふりたらぬ雨に蒸す日のぬれ縁に石榴の
花瓣こぼれたるかも

雲雀一首

春の野の姫ひなどりの天津聲茅生に老い
つつ秋さりぬらし

あざみ咲き烏瓜の葉しげみたり秋暑き日
の崖下のみち

鹽原は霧晴れ曇る山の峽に鵜羽根ふり日
ねもす鳴くか

山どりの眞羽のかぶら矢風きりて鳴りも
來よかし秋の青空

月の入りし後の空虚を寂として深夜の天
の横たはるかも

初冬のさ庭のすみの菊の鉢倒れたるまま
に今朝もありけり

冬の空さやるものなしおごそかに陽の大
き火は燃え動くなり

公園の動物園の鶴のこゑ冴え沈む夜をか
きみだすなり

護謨の木は寒がりて葉に力なし十二月の
疾風戸の外を行く

吹き去りし疾風(はやて)のあとの夜の寒さ氷の如
く流れたるかも

雨なくて乾きしらけし庭のすみに木斛(もくこく)の
葉のくろき夕ぐれ

近畿歌鈔 その三

若草山二首

奈良山を草萩ふみてよぢゆけば頭(かうべ)のそら
はあくまでも青し

咲き埋むくさはぎの花いろくすみ眞日の
草山しらけ光れり

梨棚がひとむら黑む靑田中斑鳩寺をはす
かひにして

山水は朱の歩廊の廂かげせせらぎ流れ春
日野へ落つ

藥師寺の築地の外にみちもせに敷莚して
豆殼干すも

いかるがの白檀佛のまろき肩ほそるやす
ずろ秋の日の寒き

寧樂へいざ伎藝天女のおん目見にながめ
あこがれ生き死なむかも

淺う澄む飛鳥の川の秋の水に蠶棚いくら
もひたしてありぬ

香具山を晴れゆく雨の返し風夕畑桑の葉
搖れ涼しも

大和路は梨棚の下の麥の葉にそよぐ野風
のいまだ寒しも

鴨川の磧に白うながれたる春の霜夜の月
あかりはも

花見小路二首

踊り場の門を出づれば春の夜を氷雨(ひさめ)かと
おもふ雨こぼれきぬ

女たち小走りにゆく夜の霧に行燈(あんどん)の火が
紅うにじめり

燭あかしてすりのそとは白川の細いながれがすすり泣する

ほろ酔の頰のほてりにあてよなら心地よさそな銀の小扇

河内の柏原にて

布さらし秋のあしたの眼もさやにひとすぢの水山よりきたる

吉野川を上りて四首

旅人は八十瀬に霧の沈み來るま悲し時を一人いそぐも

大川の水明りする町を過ぎて山にかかれ
ばはたと暮れたり

川中の岩疊縦(たて)に切りとほし筏の道が作り
てありぬ

ほのしろき瀬霧のなかを燈(ひ)が動く夜釣の
人の岩移りかも

歸りて後

櫟透いて川光りたる上市の上流(かみ)のあたり
のさびしさなつかし

みなし兒の歌へる　その三

根岸の頃を思ひ出でて七首

附紐のとれし寢卷を着せられてさびしう
床にはひりけるかも

妹も祖母(おほば)も泣けば家に一人の男子(なのこ)のわれ
もこらへかねつも

裏庭に砂いぢりしてありしかば父來ましぬといふ聲のする

裏庭の桑の實ひろひ食(は)みしかば妹の齒が
くろぐろと染みぬ

われは母に母は佛に嘆かひぬもらはれ行
きしいもうとのこと

秋の日のほやほや照れば萱葺の根岸の家
にすみし頃おもふ

下谷の何町とやら祖母(おほば)よりききぬ忘れつ
生まれしところ

早春の山國にて

榛名湖のほとり

楢の木に啄木鳥のうつ音けたたましし氷張る湖の汀なりけり

枯山のしろき木膚を啄木鳥は火も出でぬべくうつにあらずや

伊香保平を行く、淺間の鳴動しさりなり

山鳴りす枯野の土は微かにも下とどろきのふるへ止まずも

鶯を聽きけり或(ある)は湖のうへ或は灰ふる高
はらにして

伊香保

かがり焚く湯もとの道に君が袖匂ひし夜
ある山なれば來し

磯部温泉

雪の淺間見てゐるわれのわきに來て宿の
小女(こめ)ろがお手玉をとる

榛名の埴山姫は山々に戀ひあらそはれ丹
の頰照るかも